

# 正岡子規

委員 井田哲

思へば明治の文壇は殷盛なものであつた。小説に、和歌に、詩に、俳句に、評論に、哲學に、さては戯曲に至るまで、あらゆる方面に驚くべき發展をした。其原因に就ては勿論種々あるだらうが、一には、時勢と云ふ母が生んだ手を障へたら血が出さうな病的の狂才と、不撓不屈の天才兒との努力の結果である。活躍の賜である。そしてこれ等の大立物の殆んどすべてが、陳套を脱して新生面を開くに努め、未開墾の領域の開拓に努力したのである。即ち春暹家、二葉亭をはじめ硯友社一派以下の小説、根岸派、朝香社、竹柏園社等の和歌、日本派、筑波會、秋聲會等の俳句等舉げ來れば幾らもあるが、要するに文壇百家雜然として排出したのである。而かも浸々乎として理想へ、新光明へと進んだ。

明治が四十五年續いて、世は大正と改つてから既に家々の門に門松が六遍立てられた。時は不斷の創造を續けて總ての物は移りに移つた。此間文壇も幾多の變遷と推移とを重ねた。明治文壇の驍將も多くは斃れ、或は方向を轉じ、さては昔ながらに筆を呵して文戰場裡にともすれば頽れんとする舊壘を守つて居るものもある。而かも其多くは今なほ研究され、賞せられ、少くとも一般人の記憶の中に其名を藏せられて居るが、茲に一人短かい生涯を病苦と事業とに苦しみぬいて而かも生きては不遇に、死しては柩を蔽ふて未だ三十年、すでに記憶の庫を逐はれたる氣の毒な人がある。それは我が正岡子規である。

彼子規は名もすて戀もすて家も財も棄て果て、野心も希望も抱負をも抛ち、更に一人の母を一人の妹を一生を生命を抛擲して専念日本文學の研究に心を潛めた。中にも彼はあらゆる手段と方法とを盡して俳句の改良と勃興とに努力した。和歌の刷新に心血を注いだ。寫生文の元祖は彼子規である。彼の事業はたゞこれだけに止まらない。閑暇を偷んで小説も物してゐる。隨筆小品文の遺稿もある。而かも之れは決して彼の戯れではない世に僅かなる子規を口にする者、多くは彼をたゞ俳家とする。それは未だ充分子規を知らない者と云はねばならぬ。俳界の耆宿内藤鳴雪氏は其追憶雜記にこう書いて居る。子規居士が俳句の類題と各家々集の編纂に着手したのは、なんでも廿三四年頃では日課として居て如何なる多忙疲勞の日も決して缺がさず或は夜遅く歸宅したとしても是非従事することゝし、夜二時三時まで起きて居る事は珍らしからぬ事。其他此事件を調べて見やうとか、斯様な文句を作らうとか思ひ付いた時は、徹夜しても必ず果さねば止まぬので、云々と云つて居る。以て如何に彼が眞面目な努力と克己忍耐したか、窺はれる。

子規は二十六年一月、伊藤松宇等と「権の友」と云ふ會を組織して同三月から日本新聞紙上に俳句を連載して、はじめて世の中に見わた。これが彼の初陣である。子規が不治の病を得て初めて略血したのは二十二年五月であるが二十八年五月日清戰爭に記者として從軍中再び病を得て歸り神戸、須磨に養療したが病勢は募る一方で二十九年には既に歩行の自由を奪はれた。其後は多く病床にあつて不斷の努力を續けてゐたが卅五年の九月十九日遂に根岸の寓居に失くなつた。短い生涯である。世に見えて十四年彼は苦しみ苦しむ苦しみぬいて去つた。

曉の空に、巨匠の手に成る大殿堂の中に鑢められた寶玉の様にやんごとなき光を誇らかに萬有の上に注ぐ曉星の朝暾將に破れんとして光をつゝみ、夕の空彩雲あでやかに連り哀れ知る人の詩情を喚る頃雲間洩れてきらめき初むる明星の光に夜の序幕は初まるのである。夜をこめて絶え間なき無弦の樂につれて月の都、星の舞臺は廻る。これが夜毎／＼に變りなき天上の夢幻劇である。而かも何時の年、何時の夜にか月を壓し星を蔽ひ見る目眩く王者の如く輝きて倏忽として現はれ倏忽として去る、これを即ち大彗星の役割である。見よ元祿の昔には芭蕉出で天明の世には蕪村が出た。更に明治にして我子規が現はれたいづれも將に一個の彗星である。俳界の巨擘古今を通じて右三者を推すに誰しも異論はあるまい。

俳句大成の芭蕉の功は没すべからざるものであるが彼は談林・伊丹派の後を受けてはじめて彼の大業を成就したのである。而かも彼芭蕉は蟬吟に事へ季吟に師事して居る。芭蕉は重に俳句と俳諧連歌とに名を得て居る。中興の俊傑谷口蕪村(與謝蕪村とも云ふ)は師に其角嵐雪の門に出ると云ふ巴人があつた。俳界稍衰むたりと雖も芭蕉去つて百年を出ない。蕉門の俳師も亦く少くなかつた。蕪村は其文藝上の生命を俳句と繪畫に持つて居る。高弟几莖が彼の終焉の記を書いた中に「柳此翁無下にいはけなきより畫を好み、年をつみ南北二宗を寫得し、終に筆あり墨あるの妙にいたれり。はた弱冠の比より俳諧に耽り、蕉翁晋子の高邁を慕ひかたはら諸家の支流にわたり、縦横自在なる事集めて大成すと云ふべし。」と云ふ一節がある。これに依つて見ると繪畫も亦堂に入つて居たと思はれる。子規が蕪村を天下に紹介するまでは寧ろ畫家として有名であつた。芭蕉蕪村は斯くの如くである。さて子規はどうであつたか。

俳界の巨星蕪村は率然として安永九年樗良を先導に天明三年也有を引き具して一乗寺に消ねた。同七年に蓼太、遣第几薰寛政元年に没し續いて青羅、白雄、曉台、蝶夢、闌更前後十一年間に骨を曝した。諸星墜ちて渾沌、享和、天保降つて明治に至るまで凋落に凋落を續けた。天保時代より以下殊に惰落のどん底に墜ちた。所謂月並宗匠獨り跋扈して點料を貪り杯盤の間に弄んだ。子規の俳諧「麓の棗の評」の中に「近世の俳人漫に自分免許の宗匠を以て愚者を惑はす云々」と云ひ又「發句作法指南の評」の條に（前略）今日の如く腐敗し盡せる俳諧者流云々」とある。以て一斑を窺知する事が出来る。さて此渾沌咫尺を辨せざる時に方りいち早く曉の鐘を撞いたのは實に子規である。子規は俳句の刷進を絶叫したばかりで無く古來の俳句を網羅して俳句のエンサイクロペディアを作らんとしたが天命を貸さずしてこれは完成を見なかつたのは遺憾である前に述べた通りに月並宗匠の跋扈を恣にしてゐる中に一介青面の子規が孤軍奮闘來る者は降し迷るは追ひて全日本に伸し切つた其羽翼を折つて大改革を斷行するのは難中の至難事だ彼にして初めてなす終せたのである。たゞそれのみでも彼の功は没すべからずであるが其外彼は或は獺祭書屋俳話に或は俳諧大要に或は俳句問答に其他新聞に雜誌に將た隨筆に俳句の歸する所を示してゐる。又一方に極力古人の紹介に努めて居る。中にも百年靈名を葬られた蕪村を復活せしめたのは全く彼の功に外ならぬ。彼の文學上の貢獻は實に俳句のみに止まらない。竹の里人と云ふ雅號は彼の歌に用ひたものである。伊藤左千夫を壓いて所謂新派の和歌を初めたのは彼の力又與つて力あるものである。彼の事業は前段に一通り述べたから今更にそれを重復するの必要はないが要するに彼の文獻は確かに芭蕉蕪村の上にあると云つても決して過言ではあるまい。若しそうだとすると彼子規は實に慧星中の大慧星である。而かも彼の短い生涯が一層其感を深うするものがある。芭蕉

は五十一才にして没し蕪村は六十八の年の餅を喰つてゐる。然るにたゞ彼のみは三十六才の男盛りを忽焉として逝いた。

### 三

レンズを通じて物を視、解剖台上メスを振つて研究するのは物に依つては必要此上もない事であると同時に其對象物自身の發展、周圍の關係を明かにするのは同様に必要な上に興味多い事である。それは強ち物質對象のものゝみに限られた事ではない。例へば作物を通じて其著者を窺ひ著作物を鋭利なる理性の解剖刀下に拉し來りて其作物の眞價を知らんとすると同時に一方其著者の性質境遇を知るのは決して徒事なる事ではない。殊に詩歌俳諧等の如きものに對しては其用意が必要である。以下子規の境遇性質を調べて見やうと思ふ。

子規は明治より一年前即ち慶應三年九月十七日伊豫の松山市新玉町に生れた。彼の云ふ所に依ると父は隼太と云つて松山藩の御馬廻加番をつとめて居た人で早く死んだ。そして彼は母大原氏に養はれたのである。童名は昇と云ひ稍長じて處之助となりやがて常規と云つた。由來四國と云へば南は黒潮の暖かい流れに洗はれ北は花崗岩の白堊色が美しい瀬戸内の海に繪の様に浮いて居る所の様な感じがする。そして五月の頃には花の香がそこはかどなく漂つて風もないのに梨の花がホロ／＼と散りこぼれるあたりをうら若い涙に脆い善男善女が村から村花から花と御詠歌を流して行くのが思はれる。この美しくしい南海の樂土は俳人子規、歌人子規、天才兒子規の生地として誠に相應しい處である。こうした自然と優しい母の手一つに育まれた彼は幼年の頃から豊かな天分を持つて居た様である。

昔から幼にして其天分を發揮した話は少くない。俳句の方に例を引いて見ると、一茶は七才の時「おれと來て遊べや親のない雀」と詠んだ相である。鬼貫も七八才の頃「來い／＼と呼べど螢の飛んで行く」と即吟したと云ふ。千代女も初雪の朝背に負ぶさつて居ながら「初雪や犬の足跡梅の花」と云ふ句を詠んだと云はれて居る。背にある時代だから多くて五つ六つに違ない。然し乍ら各れを見ても年を思ひ比べると首肯かれぬ點がある。(其論はこゝに除く) 子規は三四才の時母に連れられて親類に行き其歸途我家の方角に火事ありしに母の心配に引換へ背の升さんはバイ／＼と云つて喜んだと云ふ。火事を美化してバイ／＼(提灯の事也)と見たのである。松山は俳句の盛な所で其環境の力も少くあるまい。

明治六年升さんは寺小屋に入り七年勝山小學校へ通學し十二年に卒業しそれから松山中學校に入り十六年退校して笈を負ふて處之助は遠く東京に遊學した。上京後赤坂漢學塾と共立學校に學んだ。十八年には一橋大學豫備門(翌十九年より第一高等中學と改稱)に入つた。彼はこゝで有名なる野球の投手であつた。端艇も相當にやつた相である。彼の俳句趣味は此頃から愈々熾烈になり句作もやり稍認められて居た様である。豫備門の時同窓の友であつた芳賀博士は其明治文學史上に於て此事を云つて居る。二十三年六月まで豫備門に居たが其間に彼の一大轉廻期が來たのである。即ちそれは彼が不治の病を得た事である。二十二年五月初めて咯血し夜中殆んど吐き通したと云はれて居る。其夜は流石に彼も悲憤交々至り、遂に啼血と云ふ事から「ほととぎす」の句若干を作つて爾來子規と云ふ號を得たのである。これよりさき彼は哲學と文學とを修めんと志して居た。否はじめはむしろ前者に重きを置いてゐた。彼は其頃盜化、盜花の雅號を用ひて居た。盜化とは造化の秘を盜む謂で哲學方面の事に用ひ、盜花とは藻葩の妙と盜むの意で文學的事業に用ひて居た。更に

彼自ら病床に於て左の言を爲して居る。我嘗て哲學を學ばんと欲す、哲理深奥にて際涯無きが如き處、大いに我心を牽きたるなり。(中略)先づ人智の極まる處哲理の及ぶ所を見、自ら書して曰く知るべきのみと、遂に轉じて文學に志す、(下略)と。野球の選手は病を得ると共に打棒を抛つて専心文學に心を潜めやがて俳句界の選手となつた。豫備門時代に彼は鳴雪黃塔等と漢詩俳句等を作り毎月言志集一冊づゝを出した事を記して置く。

大學に入つては彼は國文學を專攻した。彼の大學生活は學校の方よりも俳句小説に熱中した。其間の消息が彼の「墨汁一滴」の中に詳しく書いてある。更に其最後に、「明治二十五年の學年試験には落第した。リース先生の歴史で落第しただらうと云ふ推測であつた。落第もする筈さ余は少しも歴史の講義聽きに往かぬ、聽きに往つても獨逸人の英語少しも分らぬ。おまけに余は歴史を少しも知らぬ其上試験にはノート以外の事が出たと云ふのだから落第せずには居られぬ。これぎり余は學校をやめてしまふた。これが試験のしまひの落第のしまいだ。」と書いて居る。(稿者云ふ。子規隨筆の墨汁一滴の中に百二四頁から百三二頁に亘り彼は試験の事に就て書いて居る。子規の學校生活と性質とが面白く窺はれる。)[未完]